

一時代まえの生活とことば

「本を手にとつて、なんとなくお開けになつた所を、ゆつくりと読んでみてはくくださいませんでしようか。」というまえがきで読者に誘いかける本書は、愛媛県越智郡大三島町肥海にある著者が生まれ育つた村での、ひとむかし前の生活とそこで話されたことばとが丹念に書き留められた本である。

ために、第一章を開けてみる。

「12 ボールスル（ボールをする）」

……野球遊びがかくべつにおもしろかった。悪童たちが数人も寄り集まると、「ボールシューヤー。」（ボールをしようよ。）というわけで、野球がはじめられた。安打は、「ヘヤヘヤ。」と呼ばれた。おもしろいのは「ノーカン。」ということばである。たとえばこうだ。打者がはつしとばかりに打つたとおもつたら、球は上の段の大根畑に飛んでいった。守備がわは、ここで口々に、「ノーカン。」と叫ぶ。中の一人が大根畑へかけ上がっていく。一同、かたずをのんでそれを見つめるところ

で、かれは球のほうへとんでいき、見つけて早くも、「アプト。」と叫ぶ。球は大根の葉っぱに載つていたので。これをつかみとれば、土地に落ちない球の捕取ということになるから、アウトである。「ノーカン。」で一時、試合中止させておいてこのしまつである。土地に落ちていたらどうなったのか。ひろいあげた瞬間から、試合が再開されたのかもしれない……」

ベースボールという言葉も知らない、けれども自分たちだけのルールでその遊びを楽しむ田舎の子供達の姿が、「ヘヤヘヤ」、「ノーカン」、「アプト」などといった、著者のことばに対する鋭い反省によって、生き生きと再現されている。板切れのバットを使い、道具といえはゴム壘だけの、物の貧しい田舎の暮らしの中で、子供達は、さまざまな遊びを自分たちなりの工夫で開発し、遊びの生活を実に豊かなものに行っていることに驚かされる。

第一章では、こうしたたのしい遊びが、四

十近くも紹介されている。さらに、第二章では、複式の小学校での生活が、また、家庭での生活や、村の様子は、第三章 家の手つだい、第四章 衣食住の生活、第五章 年中行事、第六章 ことばの生活、第七章 村のあゆみ、にわたつて語られている。いずれも、きめ細かな、ことばと暮らしの再現によって、着実な記録となっている。

貧しい田舎の学校生活では、かならずしも十分な学力は育たなかつたようだが、そのかわり、人と自然に囲まれた素朴な生活様式の中で、まっすぐで、強い心を育み、そしてさまざまな社会生活の規則を学んでゆく子供達には、「生きる力」が十分に育っていることがわかる。

今と昔では無論、生活のスタイルは異なるけれども、だからこそ、失われつつある大事なものが改めて思い出される。たんなる昔語りではない、考えさせられることも多い本である。（B6版、二〇八ページ、昭和六一年九月二五日、和泉書院刊、一一二〇〇円）

（上田 祐二）